

1975年

この年、周総理は「四つの現代化」を再提起、国を挙げて、自然科学や社会科学、港湾や鉄道などインフラ整備に取り組み始めた。当協会も前年からこの動きに呼応し、微生物、応用植物学、触媒化学、海洋学・水産学、海洋開発、オペレーティング・リサーチ、石油化学、分子性結晶、港湾学者・技術者の交流など学術分野の多彩な交流を展開した。サイゴ



日本政府が一日も早く平和友好条約を締結するよう政府に求め、世論の喚起を図る集いが当協会の呼びかけで開かれ、各界人士百二十名が出席した。(右から)中川一政、山崎尚見、杉村春子、土岐善麿、中島健蔵理事長、前田義徳、白土吾夫、武蔵川喜偉、朝永振一郎の諸氏ら

——1975年3月3日 東京・憲政記念館

ンが陥落、アメリカの二十年にわたるベトナム介入に終止符が打たれた。中国では病気の周総理に代わり、鄧小平副総理が党と國務院の職務を主宰するようになった。国内では沖縄海洋博、山陽新幹線の岡山⇨福岡間が開通。
 ◎1月 前年の北九州展に続き「中華人民共和国漢唐壁画展」を東京と大阪で開催。
 ◎2月 日本少林寺拳法代表团(宗道臣団長) 訪中。

◎3月 東京・永田町の憲政記念館で「日中平和友好条約実現をめざす各界の集い」開催。池田大作、井上靖、茅誠司、杉村春子、田實渉、田畑政治、土岐善麿、朝永振一郎、中川一政、中島健蔵、野間省一、藤山愛一郎、前田義徳、武蔵川喜偉の諸氏が呼びかけとなり、各界の著名人士百二十名が参加。日本書道家訪中参観団(村上三島団長、香川峯雲顧問、木村美智子秘書長、浅見寛洞、大平山涛、鈴木桐華、尾崎邑鵬、加藤梅香、立石光司、香川



中国革命の聖地といわれる延安を訪れた日本作家代表団の井上靖団長(左二)、司馬遼太郎(左一)、水上勉(右三)、庄野潤三(右二)、小田切進(左三)の諸氏。唐家璇氏(右一)と

——一九七五年五月十四日 毛主席旧居前

倫子、菅野清峯、桑原喬、八木山鈴、西奥鳴琴、鬼頭墨峻、下松洋子秘書の諸氏) 訪中。仙台市勤労青年日中友好の翼訪中団(島野武団長・市長、白土吾夫副団長) 一行百二十名訪中。
 ◎4月 中島健蔵理事長が、中島京子夫人、白土吾夫、佐藤純子の諸氏を伴い訪中。中華全国体育総会代表(朱仄国際部責任者、張全徳秘書) 来日。日本出版編集者友好訪中団訪中、徳間康快徳間書店社長を団長に、松田清(日本交通公社)、白井憲定(淡交社)、中島洋典(平凡社)、斎藤稔(講談社)、逸見俊吾(青林書院)、若澤新一(築地書館)、志賀直吉(岩波書店)、黒川洸(日本経済新聞社)、林四郎(小学館)、三品美智子(小学館)、鈴木繁實(徳間書店)、鈴木征四郎(潮出版社)、谷川孝一(筑摩書房)、長谷川正継(鎌倉書房)らの諸氏。
 ◎5月 日本作家代表团(井上靖団長、井上ふみ夫人、白土吾夫秘書長、戸川幸夫、水上勉、庄野潤三、司馬遼太郎、小田切進、福田宏年、佐藤純子秘書の諸氏) 訪中。中国報道界代表团を招請、一行は、団長の朱穆之新華社社長はじめ、佟希文、胡若木、劉振洲、田家農、閔凡路、張友新、王振宇らの諸氏。
 ◎6月 日本美術家代表团(中川一政名誉団長、宮川寅雄団長、村岡久平秘書長、脇田和、高山辰雄、吉山善彦、中根寛、加山又造、平山郁夫らの諸氏) 訪中。
 ◎7月 中国科学院数学研究所代表团(顧基発団長、李秉全、越民義、劉彦



第一線の港灣学者・技術者による代表团が訪中 当時対外貿易の拡大・臨海工業都市の建設を重視していた中国にとって、港灣施設の充実が、最重要課題であった。于眉國務院交通部副部長(右三)と語り合う鶴田千里团长(左二)、白土吾夫秘書長(左一)。右一は同席した高原中国土木工学会副理事長。この頃、中国のその後の飛躍的發展につながる科学・技術分野での交流が盛んに行なわれた。

——一九七五年九月三十日 北京



日本美術家代表团が訪中した。北京・頤和園でスケッチをする中川一政名誉团长(右二)、加山又造(左一)、脇田和(左二)、中根寛(右一)の諸氏。同行の張和平氏(右三)と

——1975年6月17日

新華社社長の朱穆之氏(右一)を团长とする中国報道界代表团が来日、北方領土などを視察した。根室の納沙布岬を視察する一行。左は同行の白土吾夫常任理事

——一九七五年五月二十四日



- 佩、程侃の諸氏 来日。
 - ◎8月 日本石油化学工学者代表团訪中、水科篤郎京都大学教授(当協会常任理事)を团长に大塚浄秘書長、澁澤芳雄(丸善石油)、国井大蔵(東京大学)、山口隆章(日本石油)、中川進(東洋エンジニアリング)、岡上明雄(日本揮発油)の諸氏。日本野球・ソフトボール選手団(後藤淳团长、山川純副团长) 訪中。
 - ◎9月 中国分子性結晶考察団(銭人元团长・中国科学院化学研究所教授 来日。田畑政治(当協会常任理事)、竹田恒徳両氏ら JOC・IOC 関係者訪中。中国印刷友好代表团(王仿子团长、張治副团长) 来日。日中文化交流協会代表团(宮川寅雄团长、白土吾夫秘書長、河原崎長十郎、藤堂明保、色川大吉、堤清二、宇野重昭、永六輔、島田康夫、佐藤祥子の諸氏) 訪中。日本港灣学者・技術者代表团訪中、一行は鶴田千里運輸省港灣技術研究所所長を团长、白土吾夫氏を秘書長、土田肇(運輸省港灣技術研究所)、勝田基平(三菱重工業)、清水良次(沖電気工業)、奈良豊規(青森県港灣課)、木村美智子秘書の諸氏。
 - ◎10月 「中国写真芸術展」が名古屋・松坂屋本店で開幕、当協会と共同通信社などが主催、その後、全国各地で開催。
 - ◎11月 中国科学技術協会代表团(嚴濟慈团长) 当協会と日中経済協会の招きで来日。
 - ◎12月 日本演劇家代表团(千田是也团长、成井市郎副团长、岸輝子、森塚敏、宮本研、大塚道子、佐々木愛、江守徹らの諸氏) 訪中。
- ~~~~~
- 国交正常化が実現したとはいえ、中国では文革が終結しておらず、中島健蔵、井上靖、千田是也らが訪中しても、批判されていた巴金、夏衍、曹禺といった友人に会うことはできなかった。だが、この時期中国を訪れ、大きく動きつつある中国を実感することは、意義あることであった。司馬遼太郎氏も、不安を抱きながらこの年に訪中した一人だった。儒教による内部腐敗と列強の侵略による中国の死を予告したニューヨーク・タイムズ極東特派員によって書かれた本「支那は生存し得るか」を青年時代に読んで憂鬱な気持ちになったという氏は、帰国後この初訪中の印象を本誌に寄せ、「中国のあちこち歩きながら、以上のような過去の事どもを思い出すとき、信じがたいほどの驚きをもって、中国はたしかに生きかえったのだ、という思いが、私をゆさぶった」と記している。

(九十九)